

地域の観光白書を用いた 被災者支援の新しいアプローチからの実践

大 森 哲 至・大 下 茂

＜研究活動報告＞

地域の観光白書を用いた 被災者支援の新しいアプローチからの実践 Practices from a new approach to supporting disaster survivors using local White Paper on Tourism.

大 森 哲 至・大 下 茂

1. はじめに

三宅島は東京都に属する伊豆諸島の島である。火山島として誕生した三宅島はこれまで多くの噴火を経験してきた。過去の噴火記録は西暦 1085 年以来、1983 年の噴火まで少なくとも 14 回存在する（津久井・鈴木、1998）。それら記録によると三宅島の過去の噴火のほとんどは山腹割れ目噴火、短期間という型に属している（窪田ら、1987）。20 世紀以降もほぼ 20 年周期（1940 年・1962 年・1983 年・2000 年）で噴火をしている。1940 年の噴火では死者 11 名・負傷者 20 名の被害があった。また 1962 年の噴火では焼失家屋 5 棟の被害があった。さらに 1983 年の噴火では溶岩流による埋没・焼失家屋約 400 棟の被害があり、住民に大きな人的・経済的被害と不安を与えた。

しかし 2000 年の噴火は火山ガスの放出、活動期間の長期化などこれまでとはまったく違った噴火であった。この噴火により三宅島住民は火山ガスから身を守るため、三宅島を離れ全島避難を余儀なくされた。避難先として全体の 9 割が東京都内に避難をしたが親族・知人を頼り各地に避難したケースも含めると全国 18 都道県におよび全国各地に分散しての避難となった。

2005 年 2 月に三宅島の全島避難は解除された。しかし火山ガスの放出は避難解除後も島内の広い範囲で安全環境基準値を超える状況が断続的に続いた。その影響によって避難解除後の三宅島は、島の自然

に多大な被害をもたらすなど避難をする前とはまったく違う島になったのである。

火山ガスの健康への影響は三宅村火山ガスに対する安全確保に関する条例で長期的影響（慢性影響）と短期的影響（急性影響）が示されている。長期的影響とは持続性のせき・たんなどの症状がでるリスクが増加することを指し、短期的影響とは呼吸器や目、喉など粘膜を刺激し、高濃度になると呼吸が苦しくなることを指している。症状の程度にはかなりの個人差があり、健康な人が感じない低い濃度でも高感受性者では喘息の発作を誘発し、症状を憎悪させることがあるため注意が必要である（三宅村, 2005）。したがって避難解除後の三宅島では原則として住民も観光客もガスマスクの常時携帯が義務づけられ、呼吸器や循環器に疾患がある人、新生児、乳児、妊婦の立ち入りに制限が設けられた。

火山ガスの被害は島の自然にも大きな被害をもたらした。森林への被害は深刻であり、火山ガスによる森林の被害面積は島内全体の森林面積の6割に相当する約2,500haに及んだ。このような火山ガスの被害は自然への被害だけでなく、噴火以前の主要な産業となっていた農業や観光業に深刻なダメージをもたらすなど住民の生活再建にも多大な被害をもたらした。

さらに三宅村火山ガスに対する安全確保に関する条例では、火山ガスの危険性に応じた3種類の立入規制区域（立入禁止区域、危険区域、高濃度地区）が設定されていた。なかでも居住区が高濃度地区に指定された坪田高濃度地区及び阿古高濃度地区の住民は、他の住民が自宅復帰をするなか自宅やコミュニティに復帰できない状況を強いられた。それにより避難解除後はコミュニティの変容や分散が生じるようになった。

このように2000年の噴火による火山ガスの被害は避難解除後も継続し、その被害は被災者への健康不安だけでなく、仕事やコミュニティの回復など生活再建においても多大な負の影響をもたらした。2015

年9月に三宅島では、火山ガスの放出が大幅に減少していることから、全地区を対象にした避難解除宣言が出された。それにより島内でのガスマスクの常時携帯なども廃止になり、高濃度区域に指定されていた住民も自宅やコミュニティへの復帰が実現した。またこの頃から急速に植生の回復も見られるなど、住民の生活環境は大きく変化するようになった。

2000年三宅島噴火から今年で21年目を迎えることになるが、筆者（大森）はこれまで20年以上にわたり三宅島の被災者の精神健康問題の解明に取り組んでいる（大森, 2010; Omori・Fujimori, 2010; 大森・藤森, 2011; Omori, 2012, a; b; Fujimori・Omori, 2012; 大森, 2019; 大森・田宮, 2020; 大森・田宮・岩井, 2020; 大森, 2021）。上記の一連の研究結果では、2000年の三宅島噴火から7年後、9年後、13年後、20年後に日本版精神健康調査票（以下：GHQ28）を使用して住民の精神健康状態を縦断的に調査している。それらの結果では、2000年噴火から20年以上が経過する時点でも住民の半数以上（51.3%）に精神的悪化の疑いのあるハイリスク者が認められている。また研究結果ではこのような住民の精神健康の回復が見られない要因として、住民は火山ガスの被害が継続するなかで生活再建を強いられており、そのなかで住民の多くが日常のなかで何か打ちこめるような趣味や生きがいを喪失し、将来に対する希望をもてないことなどが関係していることを明らかにしている（大森・田宮・岩井, 2019; 大森, 2021）。

このように2000年三宅島噴火の被災者の精神健康の問題は依然として深刻な問題を抱えており、現状の課題として被災者の精神健康の回復に寄与するような支援策が求められているのである。筆者は研究成果を三宅村役場にフィードバックしていくなかで、住民が生きがいや将来に対する希望をもてるようになるには具体的にどのような支援策を検討していくのがよいのかについて三宅村役場とともに協議を続けてきた。

三宅島では避難解除後の2005年5月より観光客の受け入れを開始

し、「火山との共生」を島づくりの基本方針のもとに観光事業の推進に力を入れている。しかしその基本方針のもとに新しい観光資源や観光商品を創出し、訴求しているものの、2000年噴火以降の来訪者数は噴火前の半分以下にとどまっている。

そのようななか近年、三宅島を取り巻く状況は大きく変化している。火山ガスの放出は減少し、被害も少なくなっている。また自然も回復し、野鳥なども戻ってくるようになっていく。三宅島の近況は、2000年噴火から長い時間を経てようやく観光事業の回復と発展という新たな展開に入ることになった。したがって三宅村役場との協議においても島の状況の変化にともない、第5次三宅村総合計画に示されている基本方針を重視し、島の主要な産業である観光事業を盛り上げていくことにより、住民の生きがいの創出や将来への希望につなげていくことができるような新たなアプローチからの支援策を検討していくことになった。

また協議をしていくなかで東京都産業労働局観光部が取り組んでいる事業においても都内の観光地域振興、特に多摩地域や島しょ部の観光振興に力を入れていることを知った。東京都では東京都観光産業振興プランを策定し、区部・多摩・島しょ部の均衡ある観光事業推進を掲げるとともに、オリンピック・パラリンピック2020東京大会に向けて、2017年度より実行計画を定め、より積極的な観光事業を進めている。島しょ部観光は、1980年代の離島ブームには伊豆諸島全体で100万人を超える誘客実績があったものの、近年は約40万人前後と低迷を続けている。このような中2020東京大会を目前に控え、低迷している島しょ部への観光誘客の実現に向けた戦略的取組み事業を創設し、地域活力向上に拍車をかけて取組むとともに、ポスト2020の持続可能な観光事業の推進を図ろうとしている。筆者（大下）は第22次東京都観光事業審議会会長（現在第23次として重任）としてその事業に関わっており共同研究を行うことになった。

このような背景を踏まえ、筆者らは都下の区市町村のモデルとなる

べく持続可能な三宅島の地域活力向上グランドデザインを描くことを最終目標とし、その基礎調査として、三宅島でのインタビュー調査や既往文献調査等をもとに、地域をより深く知るための観光読本としてまとめ、三宅島の観光事業の推進に尽力したいと考えた。以上のような取り組みは2019年4月から東京都三宅村役場と連携して開始し、東京都三宅支庁、一般社団法人三宅島観光協会、東京都産業労働局観光部、ミライカナイ出版などの協力を賜りながら進捗させてきた。そしてそれら取り組みの成果物としてまとめたものが2020年9月に発行した「三宅島観光白書 三宅島学」（大下・大森、2020）である。したがって本稿では「三宅島観光白書 三宅島学」の特徴を踏まえながら、被災地における被災者支援策への新たなアプローチの可能性について考察することを目的とする。



図1 三宅島観光白書 三宅島学表紙

2. 『三宅島観光白書 三宅島学』の特徴

「三宅島観光白書 三宅島学」の特徴として次の2点があげられる。

本書の特徴の一つめは、その地域独自の観光白書を作成するという点である。各地域を紹介する観光案内やパンフレット、ホームページはたくさんある。しかし観光スポットだけでなく、その地域の歴史や地域が辿ってきた履歴、産業、観光の現状、観光施策などの全体を網羅して一冊に取りまとめて紹介されている本は少ない。わが国では国土交通省によって毎年、観光の動向や観光がもたらす経済効果などについて幅広く分析された観光白書が作成されている。これは先の東京オリンピック開催の前年の1963（昭和38）年に制定された「観光基本法」に定められた観光に関連する政策の公表の一貫として発行されているものである。地域の観光活性化をもたらし、それを維持させるには地域における現状の問題点ときちんと向き合い、その問題点をどのように改善していくかという長期的なビジョンを見据えて考える視点が必要不可欠である。本書では観光白書でとりあげられている内容を地域の視点で捉え直し、わかりやすいかたちで紹介している。

本書の特徴の二つめは、集客・観光まちづくりにスポットを当てるという点である。どんな地域に人は訪れようと思うのか、それを考えるうえで重要なことはそこに住む人たちがいきいきと元気に暮らしていることである。そこに暮らすみんなが誇りを感じて暮らす地域をつくり、他地域に住む人々に訪れてもらうことで地域は活性化していく。地域を魅力的なまちにするにはかたちあるものばかりではなく、地域に眠っている独自の資源を活かして、地域の外からたくさんの人が訪れる、魅力あるまちをつくること、「集客・観光まちづくり」という視点が重要である。本書では、地域の観光による活性化をもたらし、それを維持させるために「集客・観光まちづくり」という視点から、地域のもっている観光発展の可能性を最大限引き出したいということを大事にしている。

3. 三宅島の観光の現状

離島の観光は1970年代から80年代にかけてとても人気があった。当時、都会からたくさんの人たちが全国各地の離島を訪れ、観光客であふれていた。このような1970年代から80年代にかけて起こった現象のことを「離島ブーム」と呼んでいる。このような離島ブームが起こった背景には戦後の高度経済成長によって日本は急速に発展し、それにともない当時、人々の関心もだんだんと海外のリゾート観光地に向けられるようになった。しかし当時はまだ海外への渡航費も高額だったため身近なリゾート地として離島観光が人気になった。

1980年代後半頃から日本経済は「バブル崩壊」ということばにも代表されるように停滞するようになっていった。それにともない離島を訪れる観光客も徐々に減少するようになり、離島ブームも低迷するようになっていく。離島ブームの頃は離島という条件だけで何の策を講じなくてもたくさんの観光客を集めることができた。またたくさんの観光客が訪れることでアイデアや工夫をしなくても自然と商品が売れ、経済的効果や地域の活性化も期待することができた。しかしブームが停滞するようになったことで離島ブーム以降の離島では「どのようにすれば観光客を集めることができるのか？」という新たな転換と変革が求められるようになってきている。すなわち現代においては次の集客の糧になるものを発見・創造していかなければ離島という条件だけでは集客できない時代になっているのである。

このような離島における観光の状況と比較しながら三宅島の観光をみると、三宅島への観光客数は1973年の約13万7千人がピークとなっている。その後は2000年にかけて平均すると約8万人が三宅島を訪れており、この数は伊豆諸島のなかでも大島、八丈島に次いで3番目となっていた。

しかし2000年以降、三宅島への観光客は約4万人と半分以下になり、近年では伊豆諸島のなかでも大島、八丈島、新島、神津島に次ぐ

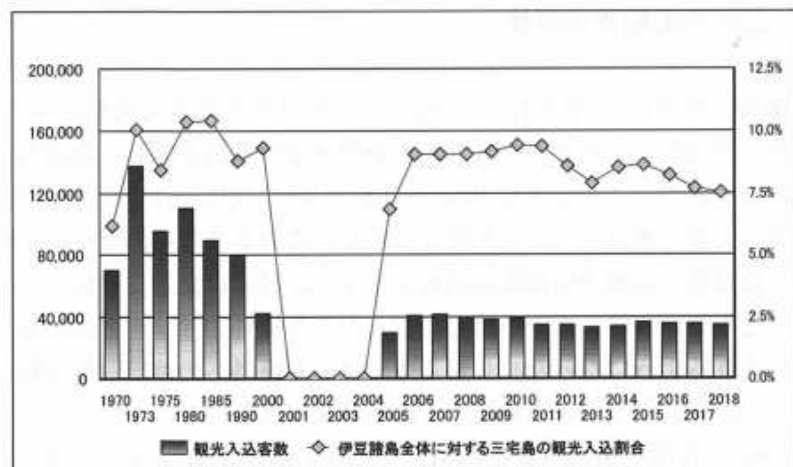


図2 三宅島の観光入込客数の推移

5番目になっている。離島ブーム以降、伊豆諸島を訪れる観光客は全体的に減少傾向にある。そのなかでも三宅島は近年、極端に観光客の数が減っている。このように2000年以降、三宅島で極端に観光客が減少している背景には2000年噴火による火山ガスの放出が続いていることが原因として大きい。したがって筆者らが取り組んできた三宅島の観光推進を含む地域活力向上グランドデザインを描くにあたっては2000年噴火以降、火山ガスの被害が継続しているという実情を考慮し、三宅島の特徴（強みと弱み）について調査、分析を行なった。

4. 三宅島観光の魅力と特徴

次に筆者らが取り組んできた三宅島における調査、分析の結果を踏まえ、三宅島にはどのような観光の魅力があるのか、三宅島の魅力的な観光推進につながる5つの特徴をまとめる。

4-1. エコツーリズム：環境と生態系に恵まれた島

エコツーリズムとは英語の Ecology（生態系・環境）と Tourism（観光）を組み合わせた造語であり、地域の自然の大切さを理解する新しい観光ツアーのかたちである。エコツーリズムにおいて大事なことはその地域における自然や文化などの資源の魅力を地域が再認識しながら観光に役立て、地域振興に結びつけていくことである。観光産業の発展も目指すエコツーリズムは持続可能な観光のあり方として注目されている。ここでの持続可能な観光とは観光地が将来にわたっていつまでも安定的に発展させることを目指す取り組みを指している。三宅島には豊富なエコツーリズムの資源がある。その代表的なものを紹介する。

【巨樹】三宅島の森では、何百年という長い年月をかけて常緑広葉樹「スタジイ」と呼ばれる巨樹が育っていて1,000本以上あるといわれている。なかでも有名なのが大路池のすぐ近くにある樹齢600年以上といわれる「迷子椎」である。この迷子椎は神秘的なパワースポットにもなっていて訪れる人たちにたくさんのエネルギーと癒しを与えてくれる。

【バードウォッチング】三宅島は別名「バードアイランド」と呼ばれており、野鳥の聖地になっている。島内では国の天然記念物であるアカコッコやカラスバト、イイジママシクイなど珍しい野鳥を観察することができる。また沖合約10kmにある大野原島（通称：三本岳）の岩磯は海洋に生息するカンムリウミスズメ（国の天然記念物）の貴重な繁殖場所になっている。野鳥の生育密度が高く、探鳥ポイントのひとつである大路池の周辺は「日本一のさえずり小径」ともいわれている。隣接する「三宅島自然ふれあいセンター・アカコッコ館」には日本野鳥の会のレンジャーが常駐し、野鳥観察のほか三宅島の自然や火山についても知ることができる。

【ダイビング】三宅島はサンゴの種類も多く、島の南西部の富賀浜には世界最北限のテーブルサンゴの群集がある。透明度の高い海のなか

では大型の回遊魚や色鮮やかな熱帯魚、ウミガメなどさまざまな生き物と出会うことができる。またメガネ岩付近には海中アーチがあり、海底でも火山島ならではの独特な地形を楽しむことができる。

【釣り】三宅島の周辺はすべてが釣りのポイントとなっていてイシダイ、メジナ、ヒラマサ、シマアジなど種類豊富な魚の宝庫である。何度も来島する釣り客（リピーター）が多く、断崖絶壁の荒磯釣りや本格的な磯釣りも楽しめる。沖合約10kmにそびえる大野原島（通称：三本岳）も大物が釣れるポイントと地元ではいわれている。

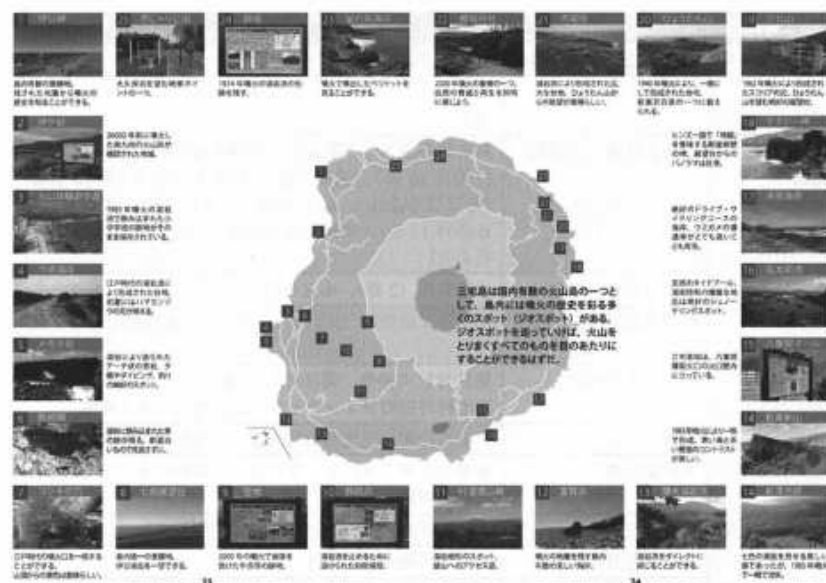
4-2. アースデザイン：島全体が火山博物館

三宅島は活発な火山島である。噴火はときに大きな災害になるが、それによって生み出される独特な景観を目にすると、火山の脅威、凄まじさや迫力ある地球の息吹を感じることができる。島内には溶岩原や太古の地層、火山跡などが点在し、島全体が火山博物館のようになり、火山が生きていることを実感することができる。三宅島では過去の火山活動によって生み出された独特な景観を紹介するための取り組みとして「三宅島ジオ MAP」を作成し、観光客がサイクリングやウォーキングを楽しむためのポイントを紹介している。

【火山体験遊歩道】1983年の噴火によって溶岩流に飲み込まれた阿古集落跡に整備されている遊歩道。小中学校跡も当時のままの残されていて、噴火のすさまじさを直接感じることができる。

4-3. シビックプライド：暮らしぶりや地域の文化を大切にする心

三宅島には昔から続いている行事がたくさんある。正月行事の船祝いにはじまり、迫力ある神輿と木遣太鼓の「牛頭天王祭」、「富賀神社大祭」などがある。時代とともに変化しつつも、島の文化・伝統として守られ継承されている。また東京都の無形民俗文化財にも指定されている歌や踊り、神事もある。郷土芸能の島節、木遣、太鼓、獅子舞、踊りなどは、各地区の芸能保存会や青年団などによって受け継が



「三宅島ジオ MAP」は日本語・英語版の2種類が用意されています。また、日本語・英語併記の「ジオスポット看板」も設置されており、これを目印に、火山の痕跡をめぐるのが楽しみです。

図3 三宅島ジオ MAP

れている。さらにそれらは島の学校の授業の一環として取り入れられるなど、世代を越えて文化が継承されている。三宅島には、国、都、村から指定されている天然記念物などの有形・無形のさまざまな文化財が多くある。保存されている工芸品の一部は三宅島郷土資料館に展

三宅島の指定文化財一覧		
国指定文化財	重要文化財（工芸品）	銅造観音菩薩立像（坪田・海蔵寺）
	天然記念物	カラスバト、アカコッコ、カンムリウミスズメ、イジマムシクイ
	有形文化財（工芸品）	銅製鍍金銚子、銅製提子、陶製黒釉瓶子、銅鏡（鸕鷀双紋鏡外10面）、銅鏡（籬二菊花双鳥鏡外3面）、銅鏡（菊花双鳥鏡外32面）、銅鏡（菊花双鳥文）、銅鏡（松喰鶴鏡外17面）、銅鏡（蓬葉双鶴文外1面）、銅鏡（山吹双鳥文）
	有形文化財（彫刻）	木造薬師（2面）、木造薬師如来坐像
	有形文化財（古文書類）	三宅島民政資料（303冊・172通）、三宅島民政資料（107点）
	無形民俗文化財	御笏神社の神事、御祭神社の神事、三宅島の歌と踊り、三宅村坪田のヨミンチャラ、富賀神社の巡り神輿
	史跡	三宅島役所、三宅島大里遺跡、三宅島ココマ遺跡
村指定文化財	天然記念物	神着の大ザクラ、ビヤクシン、堂山のシイ、三宅島椎取神社の樹叢と溶岩流
	有形文化財（工芸品）	普濟院銅鉦、ヨイト船、刀剣、御笏神社御刀
	有形文化財（彫刻）	善光寺式阿弥陀如来像
	有形文化財（古文書類）	小金井小次郎自筆証文（2通）、井上正鉄の書
	有形文化財（建造物）	さかえばし
	旧跡	竹内式部の墓、不受不施派僧の墓、小金井小次郎の首切り地蔵、井上正鉄の墓、生島新五郎の墓、小金井小次郎建立の地蔵尊、小金井小次郎井戸、処刑場跡
	天然記念物	大路藻、迷子椎、普濟院の大桜、普濟院の蘇鉄、ハコネコメツツジ、リュウビンタイ、オオシマハイネズ、ミヤケコガラ、オーストンヤマガラ、タネコマドリ、モスケミソサザイ、ウチヤマセンニユウ、シチトウメジロ、坪田観音



出典：東京都総務局三宅支庁（平成31年3月）『三宅島（冊子）』、p.63より引用



出典：東京都総務局三宅支庁（平成31年3月）『三宅島（冊子）』、p.64より引用

図4 三宅島の代表的な祭り（左は富賀神社大祭、右は牛頭天王祭）

示され、旧跡・史跡などは観光資源として活かされている。また次の世代に残していくためにアカコッコをはじめ天然記念物の保護にも取り組んでいる。

【歴史と史跡】島内の各地区には縄文時代などの遺跡があり、そのときから人が住んでいたといわれている。江戸時代は幕府の天領（直轄地）となり、1878（明治11）年に静岡県から東京府（現在の東京都）に編入された。三宅村は1956（昭和31）年に旧3ヶ村が合併して誕生した。長い歴史のなかで繰り返す噴火を乗り越えて島は発展してきたのである。

江戸時代には流刑地として約200年間に1,000人以上の人々が三宅島に送られた。なかにはさまざまな知識などをもつ流人もいて、三宅島の文化に少なからぬ影響を与えた。歌舞伎役者の生島新五郎をはじめ、禊教教祖の井上正鉄、任侠の小金井小次郎、尊王思想家の竹内式部、絵師の英一蝶などの歴史上の人物もおり流人にまつわる史跡などは島のいたるところで見ることができる。また三宅島には120社ちかくの神社が存在するといわれている。そのなかでも有名なのは式内社と呼ばれる神社である。全国にある式内社2,861社のうち、12社が三宅島に存在する。式内社とは、927年（延長5）年に編纂された当時の全国の神社一覧（延喜式神名帳）のなかに記載されている神社のことを指している。

【三宅島のお祭り】三宅島に古くから継承されているお祭りがある。その一つが富賀神社大祭である。富賀神社大祭は2年に1度（奇数年）、8月4日から9日までの6日間をかけて行われる阿古の富賀神社のお祭りである。このお祭りは、富賀神社の神輿が旧五村（阿古・伊ヶ谷・伊豆・神着・坪田）に一泊をしながら、島内を巡る祭礼行事になっている。渡された神輿は各地区の御旅所に安置され一泊をするが、その日は各地区でお祭りが催される。祭りの見どころは、神輿の周りの旗や獅子舞・太鼓が地区によって異なること。また地区から地区への受渡式は祭礼中最も盛り上がる場面になっていて、その迫力か

ら「けんか神輿」とも称されている。富賀神社の神輿は、言い伝えによると平安時代に奉斎されたといわれている。このお祭りが現在のようなかたちになったのは明治16年頃と言われているが、現在も三宅島における伝統的な祭礼行事として引き継がれている。

もう一つは牛頭天王祭である。牛頭天王祭は毎年7月中旬に五穀豊穡・大漁・家内安全・無病息災を祈願し、神着地域の御笏神社で行われるお祭りである。牛頭天王は御笏神社のご祭神であり、災害や疫病を司る神だといわれている。この牛頭天王を祭る牛頭天王祭は江戸時代から継承され、太鼓と木遣りが神輿を先導し、神着地域を巡行する。要所要所で神輿が大きく揺まされると観客からは盛大な拍手が起こる。祭りの見どころは、祭りの最後に神輿を納めるための担ぎ手の

表1 三宅島に伝わる代表的な民謡

三宅島の民謡	
島節	三宅島かよ 緑の島か 小鳥さえずる唄の島 わたしゃ三宅の 御神火育ち くちにゃ出さねど こがす胸 水になりたい 三宅の水に 可愛いあの娘の化粧の水 二度と来るなよ 三宅の島へ 来れば帰るがいやになる
江島	花の江島が 唐糸ならば たぐりよせたい膝元へ 鳥の身なれば 近くの森で こがれて鳴く声きかせたい 雨はしょぼしょぼ 夜はしんと 心細さよ夜は更けて
三宅島音頭 作詞 野口魚酔 作曲 菊池淡水	ハァーアァー 都はなれてあこがれのせて 夢のまにつく 夢のまにつく三宅島 ホンニヨイトコ コラヨイトコナー
あじさい音頭 作詞 野口魚酔 作曲 春日八郎	海の碧さよ 雄山もはれて 浪にうかんだ三宅島 磯の香りにめざめた春に 島は七重の花ざかり わたしゃ三宅の あじさい娘 島で生まれて島そだち 花は七度 化粧をしても 思いひといろ春に咲く

資料：三宅村役場（昭和47年4月1日）『三宅村村勢要覧～昭和45年・46年版』、p54

攻防であり、観客は例年最高潮に盛り上がる。

【三宅島の伝統芸能】三宅島に伝わる伝統芸能として獅子舞、三宅太鼓、木遣り唄などが有名である。三宅島に古くから伝わる伝統芸能として獅子舞がある。獅子に頭を噛んでもらうと厄払いや無病息災の効果があるといわれている。三宅島では現在も獅子が各家庭を踊り歩き、厄払いをする「初午祭」が行われるなど、その伝統が各地域の青年団や芸能保存会を通じて保存され、受け継がれている。また三宅太鼓は神着地区に伝わる伝統芸能で「木遣太鼓」とも呼ばれている。その起源は言い伝えによると江戸時代後期に島民が伊勢参りに行き、その帰りに立ち寄った祇園祭での太鼓のリズムを三宅島に持ち帰ったのが最初だといわれている。三宅太鼓は毎年行われる「牛頭天王祭」でも、巡行が終わる16時頃から神輿が納められるまで披露される。さらに木遣り唄とは神輿を先導し、櫓を持ちながら唄う伝統芸能である。この木遣り唄の起源は桃山時代に発祥した労働歌だといわれている。三宅島ではもともと廻船での荷下ろしの際や山から木材を運搬する際に力を合わせる音頭として唄われていた。その伝統は現在でもかたちを変えて引き継がれ、牛頭天王祭などで神輿を盛り上げている。この他にも三宅島には多くの歌（民謡）が伝えられ、現在も残っている（表1）。

4-4. 危機管理：火山との共生

三宅島では災害時の対応や津波危険区域などを示した「三宅島防災のしおり」「防災マップ」の作成や海拔掲示板を設置するなど防災意識の向上に取り組んでいる。噴火や台風、津波などのさまざまな自然災害に対応できるよう、住民の安全確保と災害対策の強化を推進している。また現在も続く火山ガスの放出を24時間体制で観測し、必要に応じて情報伝達する「火山ガス観測システム」を構築しているほか、災害などのあらゆる緊急情報を瞬時に伝達できる「全国瞬時警報システム（J-ALERT）」を導入している。さらに、住民への防災対策

として、2011（平成23）年「IP告知端末（テレビ電話）」を島内の全世帯に設置し、村からのお知らせのほか、船と飛行機の運航状況などの生活情報や火山ガスに関する情報なども提供している。

【立入規制区域と内容】三宅島では火山ガスの危険性に応じ、1立入禁止区域、2危険区域、3高濃度地区の規制区域が設けられている。現在も2種類の立入規制区域が残っており、無許可での立入が認められていない。令和2年度からエコツーリズムの推進により、危険区域の一部へ立入が可能となる（表2）。

【回転灯付き屋外拡声子局の設置】島内の43箇所に屋外拡声子局が設置されており、屋外で注意報・警報等の情報が伝わるようになっている。そのうちの14箇所には注意報・警報の状態を示す回転灯があわせて設置されている。警報（火山ガスレベル4：赤色）、一般注意報（同レベル3：緑色）、高感受性者警報（同レベル2：黄色）、高感受性者注意報（同レベル1：青色）の4色で情報を伝えている。

【災害への備え（火山ガスから身を守る防災十か条）】「三宅村防災のしおり」では、火山ガスから身を守ることを中心に、①火山ガス発生前にできること、②火山ガスが発生したら、の段階に応じた対応を示

表2 立入禁止区域と規制内容

名称	地域設定	規制内容
①立入禁止区域	火口縁から海側方向に100mの範囲	立入禁止。ただし、火山学者および研究者等の立入は可能（火山活動の監視、観測、学術研究等／登録・許可が必要）。
②危険区域	立入禁止区域の外側から、環状林道（通称：鉢巻道路）までの範囲	立入禁止。ただし、復旧作業等に係る関係者は立入可能（許可が必要）。
③高濃度地区	危険区域の海側で、火山ガス濃度の高い「坪田地区」	原則立入禁止および居住禁止。ただし、島民の生活上必要不可欠な行為等については、条件を付した上で立入可能とする。必要最低限通過のみが認められている。自動車で通過する場合は、窓を閉め切り、エアコンを内気循環にして速やかに通過すること。
※③は現在地域指定されていません。		

出典：三宅村（平成17年1月）『三宅村 防災のしおり』、p.7

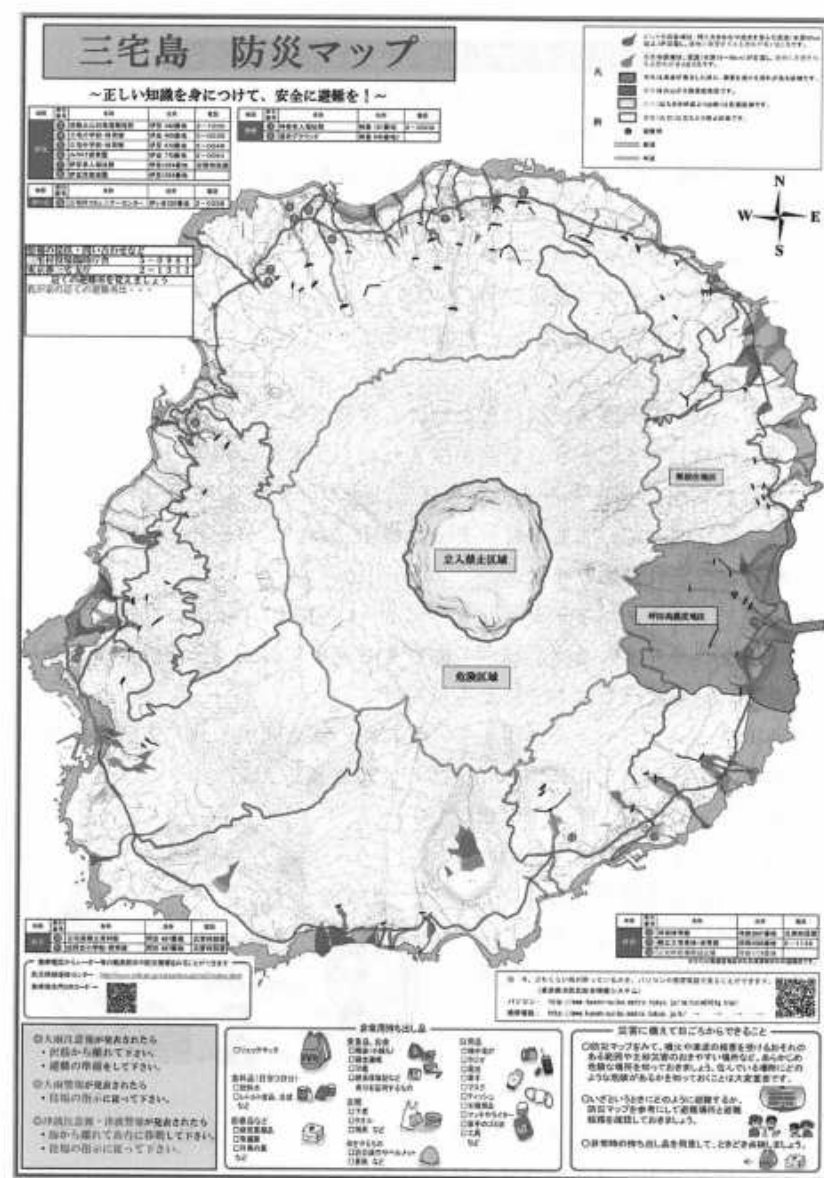


図5 三宅島防災マップ

り身や燻製などに加工販売され、岩ノリやテングサなどは乾物として販売されている。

【農業】2000年の噴火以前は海洋性の温暖な気候を活かし、アシタバやキヌサヤなどの野菜とレザーファンやタマシダなどの切葉類を中心とした花木観葉植物の栽培が盛んであった。特にアシタバは伊豆諸島最大（国内最大）の産地でレザーファンとともに村の基幹作物となっていた。2000年噴火以降、継続する火山ガスの噴出は農作物への多大な被害をもたらしている。そのため三宅村では避難解除後、作物転換も視野に入れた営農再開の取り組みが行われている。復旧した農地では比較的火山ガスに強いアシタバや赤芽イモ（サトイモ）などの作付けが多くなっているほか、コルネディリーネやキキョウランなどの切葉類もハウスで栽培されるようになってきている。また火山ガスの影響を受けにくいパッションフルーツの栽培もはじまり、三宅島の新たな特産品として注目されるようになってきている。

5-2 連携（産業間連携・世代間連携・地域間連携）

島としての特性である完結を基本としつつも連携によってさらに大きな可能性へと地域を導くことができる。連携には産業間の連携、世代間の連携、地域間の連携の3つの連携に取り組むことが求められる。

【産業間連携】現代の観光はこれまでの郷土料理や伝統工芸などの地域の特産品だけでなく、観光客の求めるものに応じてさまざまな商品を提供する新たな取り組みが必要になってきている。観光客の求めるものに応じたさまざまな商品を提供するためには多くの人々の気を惹き、人々を集める地域集客商品を開発していくことも重要である。地域集客商品を開発するには地域で発展してきた独自の産業だけで頑張るのではなく、地域のさまざまな産業が連携・協力し、アイデアや工夫を出し合うことで地域集客商品の生まれる可能性が高くなる。“これっ”といった知名度のある資源がなくてもアイデアや工夫次第で

んな地域でも観光客の求める商品づくりの可能性が埋もれているのである。

ここでは三宅島の地域集客商品の例としてアシタバについて紹介する。アシタバは伊豆諸島に自生するセリ科の野草で昔から三宅島では食用、お土産品として親しまれてきた。アシタバの名前の由来は、「今日、葉を摘んでも明日にも新芽を出す」ところからきているといわれるほど生命力の強い植物である。天ぷらやおひたしにして食べるとおいしく三宅島では昔から常食されてきた。このアシタバについて近年、豊富なミネラルとカルコンを含んでいることがわかり、健康野菜として注目されるようになってきている。とくにアシタバに含まれるカルコンは他の野菜にはない特有の成分であり抗菌作用が強く、血栓の予防や動脈硬化、ガン予防などに効果があることが話題になっている。

三宅島では2000年の噴火以降、このようなアシタバの特性を活かし、アシタバを主要な特産品とする動きがはじまっている。たとえば「三宅島のあしたばカレー」「あしたば炊き込みごはんの素」「三宅漬（アシタバを原料とした漬物）」「あしたばアイスクリーム」「あしたば



（一社）三宅島観光協会で取り扱っているアシタバ関連の特産品
（2020年3月筆者撮影）

図7 アシタバ関連の特産品

バームクーヘン」「あしたばラスク」「あしたばリーフパイ」「乾燥粉末あしたば」などがある(図7)。このように三宅島では2000年噴火以降、アシタバを中心にさまざまな産業が連携しながら地域集客商品の開発に取り組んでいる。

【世代間連携】地域の人たちの愛着や誇りの多くは地域の固有の文化や生活・暮らしに密着しているもののなかにある。他の地域が真似ようとしても追いつけないもの、他の地域との違いを見出せるものそれが地域の記憶である。それぞれの家では先祖から受け継いだものを子ども、孫の世代にどのように残すかを当たり前のように考えて行っている。これこそがその家の固有の記憶を先祖から今につなげ、後世に伝える取り組みである。地域のなかにはそれぞれの家と同じようにその長い歴史のなかで培われてきた価値観やしきたりがある。すなわちこのような個々の家での取り組みを地域で展開していくことが地域の記憶につながるのである。地域が着実に成熟の途を歩むためには地域の記憶をまちづくりの精神背景に置く取り組みが必要不可欠となる。ここでなければ体験・経験することができないという地域のアイデンティティを強めることになる。

ここでは三宅島の地域の記憶として「もやいの精神」を紹介する。三宅島には「もやい」と呼ばれる住民同士の相互扶助、助け合いの精神が育まれている。この「もやい」は日常生活や冠婚葬祭などの場面で代々、受け継がれている。たとえば日頃から住民同士でお互いに助け合い、なんでも相談する、役所からの大切な情報なども電話や郵便よりも住民同士の伝達により情報共有する、さらに冠婚葬祭などは近所の人たちがみんな協力・参加するなどもやいの精神は三宅島での暮らしのなかで必要不可欠になっている。地域のなかで当たり前が存在していることでも地域の外から見るとお宝が眠っている場合もある。観光、あるいは旅に出ることは日常生活にはない刺激を得ることであることが多い。すなわち日常との対比(コントラスト)を感じなければ人はそこに楽しみを感じることは難しく、人を集めるこ

とも困難になる。このような日常との対比という点を踏まえると、日常生活のなかで人との交流の希薄化やインターネット・スマートフォンに頼った生活をしている都会の人たちにとって、三宅島の暮らしは大きな魅力の要素を含んでいると考えることができる。地域の記憶をまちづくりに活かすことが地域の成熟には欠かせないのである。それを継続していくには時代や社会の変化はあっても地域の記憶をまもり、次の世代につなげていくことが重要になる。

【地域間連携】江戸時代の記録によると「霊岸島(現在の東京都千代田区)を出港した帆船が三宅島に到着したのが80日目だった」と書かれている。この記録からもわかるように、江戸時代には都心から三宅島までは帆船で数十日、天候によっては数ヶ月もかかっていた。江戸時代とは違い、現代では大型客船で都心から三宅島へは約6時間、あるいは飛行機を利用すると45分で行くことが可能になった。このような交通機関の発展によって、現代では観光客の往来だけでなく、三宅島の情報や特産品を都心の人たちにも知ってもらうことが可能になった。

地域の活性化には一つの地域の頑張りだけでは限界ある。持続的に地域への集客や関心をもってもらうためには地域の内からだけでなく、地域の外からも積極的に地域の存在感をアピールするための情報を発信しつづけていくことも必要である。地域の外にはその地域のことを知らない人たちがたくさんいる。たとえば三宅島の場合も「三宅島はどこにあるのだろうか?」「三宅島はどんなところなのだろうか?」「三宅島ではどんなものがつくられているのだろうか?」など三宅島の外には三宅島のことを知らない・わからない人はたくさんいる。三宅島のことを知らない・わからない人の関心を惹くには三宅島の情報にふれるきっかけが必要になる。たとえば「近所のスーパーで三宅島で採れた魚を売っていた」「今日、行ったレストランで食べた野菜は三宅島産だった」など三宅島のことを知らない・わからない人が関心をもつきっかけは意外なところに潜んでいることがある。またそんな関

心から三宅島を訪れようとする人もたくさんいる。したがって地域を活性化させるためには地域の連携という取り組みが大事になってくる。すなわち三宅島の内からだけでなく、地域で連携をして三宅島の外（都心）からも三宅島の情報を積極的に発信してもらうことが重要である。

地域の連携においては都心との連携だけでなく、伊豆諸島の各島との連携も必要である。地域の潤いを一つの地域で独占するのではなく、地域全体で共有することで地域全体の活性化につながり、地域全体のリピーターの確保につながる。たとえば「三宅島が楽しかったので次は隣の御蔵島にも行ってみよう」と思うなどである。持続的に地域への集客や関心をもってもらう、あるいはリピーターを確保するにはその地域を訪れた「満足度」や「地域へのよい印象」とあわせて「一度に全てを見ることができなかった」という余韻の気持ちを残すことも重要になる。一つの地域における集客や活性化に成功してもそれで安泰ではない。どんなに魅力的な地域でも、それを維持させるのは難しい。地域の魅力を維持させるには一つの地域の魅力づくりもちろん大事だが地域全体で協力し、地域全体の魅力づくりに磨きをかけていくこと、それが観光客に「訪れたいと思わせつづけること」につながるのである。

以上が筆者らの考えた三宅島の観光推進の骨格となる魅力と特徴である。今後は筆者らが提案したグランドデザインをより具体化すること、またグランドデザインを描くだけでなくその実現化を目指して今後も三宅村役場と連携をしながら観光産業の回復と発展につなげていきたいと考えている。

5-3 被災地における被災者支援策への新たなアプローチの可能性

災害は突然襲いかかり、被災者の日常を大きく変える出来事になる。災害による苦しみ、悲しみは実際に災害を体験した人たちでなけ

ればわからないこともたくさんある。また災害前の日常を取り戻すには一般の人たちが考える以上に長い時間が必要である。2000年三宅島噴火以降の被災者の生活再建の状況は非常に過酷なプロセスであった。火山ガスの放出は15年以上にわたり継続し、自然への被害だけでなく、生活再建においても深刻な被害をもたらした。

筆者（大森）はこのような三宅島の被災者の精神健康の問題を20年にわたって調査してきた。そのなかで問題の実情把握はもちろん重要であるがそれとあわせて被災者の精神健康の回復に寄与する支援策を検討し、実践していくことの重要性を常に考えてきた。災害研究の先行研究においては被災者の精神健康の回復に寄与する支援策として、災害後の行政による支援や心のケア活動などの重要性が指摘されている。しかし三宅島の被災者のように災害の被害が長期的に継続する事例においては、被災者の多くが日常のなかで打ちこめるものや生きがいを喪失していたり、また将来に対する期待や希望を見出せないことが精神健康の回復を抑制していることが明らかになっている。このことは三宅島の被災者のような継続する災害下の被災者にとっての支援策においては行政の支援や心のケア活動だけでなく、被災者に打ちこめるものや生きがいを提示したり、また将来に対する期待や希望を提示することができるような支援策もあわせて検討していくことの必要性を明らかにしている。したがって本書の作成においてもこのような三宅島の被災者の研究結果を考慮した上で地域の観光活性化をもたらすことにより、被災者に日常における生きがいの創出や将来に対する期待や希望をもってもらえることを重視した。同時にそれらの実現には三宅島観光における現状の問題点ときちんと向き合い、その問題点を今後どのように改善していくかという長期的なビジョンを見据えて考える視点が必要であると考えた。また本書の作成においては2000年噴火を体験した被災者だけでなく、次世代の三宅島を担っていく三宅島の子どもたちにも自らの地域の魅力や可能性を知り、それらを自らの力で維持・発展できるようになることも重要であると考え

た。

わが国における被災者支援策のアプローチとして、本書のように地域の観光白書をまとめ、被災者の日常における生きがいや将来に対する期待や希望を創出する試みは類を見ない。しかし筆者らの新たな被災者支援のアプローチは新聞記事(図8)でも紹介されるなど、三宅島の住民だけでなく他の伊豆諸島の住民や他の被災地の被災者に対しても期待や希望を届けることができると考える。観光は地域に経済的な効果をもたらすことが期待されるだけでなく、地域での働く場づくり、環境や景観づくり、伝統文化の継承、子どものふるさと意識を高めるなど、魅力ある島づくりの目標ともなる大切な取り組みとなることが推察される。今後の課題として筆者らが提案したグランドデザインをどのように実現していくか、三宅村の総合計画の基本方針であ

(1) 2021年(令和3年)5月8日(土曜日)



図8 本取り組みを紹介された新聞記事

る「火山とともに生きる、新たな島づくり」を目指し、ここからさらに三宅村役場や住民との連携や協議を重ね、その実現に向けて取り組みたいと考えている。

引用文献

- 津久井雅志・鈴木裕一(1998) 三宅島火山最近7000年間の噴火史 火山 43. P.149-166.
- 窪田暁子・石原邦雄・藤崎宏子・小林良二(1987) 災害後の生活再建——昭和58年三宅島噴火後の阿古地区における生活再建調査—— 東京都立大学人文学報, 194巻.
- 大森哲至(2010) 繰り返される災害下での精神健康の問題 - 2000年三宅島雄山噴火後の坪田地区住民の精神健康について 実験社会心理学研究, 第50巻1号. P.60-75.
- Omori, Tetsushi, Fujimori, Tatsuo. (2010) Recurring Natural disaster and their psychological influence on the survivors. The Yokohama Journal of Social Sciences, Vol.15. (4) P.117-128
- 大森哲至・藤森立男(2011) 繰り返される自然災害と被災者の長期的な精神健康の問題? 2000年三宅島雄山噴火後の坪田地区住民の精神健康について? 応用心理学研究 36 (2). P.69-78.
- 大森哲至(2012) 継続する自然災害における高齢者のライフイベントに関する研究 -2000年三宅島雄山噴火で被災した高齢者の復興曲線を用いた質的調査からの検討- 財団法人明治安田こころの健康財団2012年度研究助成報告書 P.31-37
- Omori, Tetsushi. (2012) Recurring Natural disaster and its influence on the Mental Health of Older Adults. The Yokohama Journal of Social Sciences, Vol.16. (4) P.109-121
- Omori, Tetsushi. (2012) The Recurring Natural disaster and the Problem of PTSD among Older Adults. The Yokohama Journal of Social Sciences, Vol.17. (3) P.63-72
- 大森哲至(2019) 継続する自然災害の被害と被災者の心理的影響 -2000年三宅島噴火の被災者との面接調査からの検討- 帝京大学外国語外国文化 第10号 P.49-74

大森哲至・田宮憲（2020）継続する自然災害における高齢者の復興曲線に関する研究 -2000 年三宅島噴火で被災した高齢者のライフイベント調査からの検討 - 帝京大学短期大学紀要（40）P-15-30・

大森哲至・田宮憲・岩井美路子（2020）継続する自然災害の高齢者の精神健康への影響 -2000 年三宅島噴火から 13 年後の高齢者の精神健康調査から - 帝京大学外国語外国文化 第 11 号 P. 29-50

大森哲至（2021）継続する自然災害による被災者への長期的影響 -2000 年三宅島噴火から 20 年後の被災者の精神健康調査から - 日本応用心理学会 第 87 回大会 プログラム P.52

大下茂・大森哲至（2020）三宅島観光白書 三宅島学 地域をより深くするための観光読本・三宅島の素顔 - これまでの三宅島、そしてこれからの三宅島 - ミライカナイ出版